
シンポジウム 4

慢性腎不全の治療；保存期治療～移植まで

座 長 今 村 亮 一（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 泌尿器科学分野）
山 田 保 俊（鹿児島大学病院 血液浄化療法部）

司会のことば

わが国において、いわゆる慢性腎臓病は成人の5人に1人といわれ、今や重要な国民病のひとつである。その中でも、とくに腎機能が著しく低下し慢性腎臓病ステージ4以上の状態が、一般的に慢性腎不全と定義されている。慢性腎不全がさらに進行すると末期腎不全となり、腎代替療法を検討すべき状態となる。現在末期腎不全に対する治療として血液透析・腹膜灌流・腎移植があり、近年では新たなオプションとして保存的腎臓療法も提示されている。腎不全に対する治療は腎臓内科と泌尿器科の境界領域であり、腎移植に関しては移植外科と泌尿器科の境界領域である。泌尿器科には先人の努力により長年これらの治療の中心を担ってきた歴史があり、西日本地区でも引き続き牽引していく責務がある。

本シンポジウムでは腎代替療法の中でも腎移植に焦点を当て、西日本地区で積極的に腎移植を牽引されている施設の先生方に、腎移植に対する取り組みとともに、独自で積極的に取り組まれている事項に関しご講演いただいた。長崎大学の望月先生には臍腎同時移植や肝腎同時移植といった多臓器移植に対する取り組み、消化器外科

との連携に関しご講演いただいた。大分大学の安藤先生には献腎提供の実績が少なかった大分県での、行政と一体化した新たな取り組みである「臓器移植医療連携強化事業」に関しご講演いただいた。愛媛大学の宮内先生には動脈硬化や萎縮膀胱等、長期透析に伴う合併症を有する症例に対する腎移植に関しご講演いただいた。鹿児島大学の見附先生には近年増加傾向にある先行的腎移植のメリットと諸問題についてご講演いただいた。岡山大学の西村先生にはSNSやプレスリリース等のメディアを通じた腎移植の情報提供と腎移植の推進に関しご講演いただいた。いずれも素晴らしい取り組みであり、熱のこもった内容である。

泌尿器科医は慢性腎不全の保存期から移植まで一貫して関わっており、腎移植手術においても血管操作と同等、あるいはそれ以上に重要な尿路操作と管理に精通していることから、泌尿器科医こそが中心として関わっていかなければならない医療分野であると改めて感じさせられた。各施設のさらなる発展と相互の連携体制により、泌尿器科医が保存期の慢性腎不全の患者さんに対する医療に加え、末期腎不全の患者さんへ素晴らしい腎移植医療を提供し続けられることを願ってやまない。